



司法面接支援室通信



(2014.3.15発行)

2013 年度 特別版

【代表者からのご挨拶】



研究協力登録者のお子様、保護者の皆様には、本年度も司法面接研修や調査において、たいへんお世話になりました。

専門家を対象とした司法面接研修では、道内外の児童相談所の心理司、福祉司の方々、そして全国から来られた警察官の方々の演習に「面接を受ける役」としてご協力いただきました。また、調査では小学校 1 年生、4 年生、6 年生のお子さまに、「詳しく話す、ざっくり話す」という報告の仕方に関する研究にご協力いただきました。

お子様、保護者の方々のご協力なしには、研修も研究も進みません。本当にどうもありがとうございました。どうぞ来年度もよろしくお願い申し上げます。この成果を研究の発展と安心して暮らせる社会作りに活かしてまいりたいと思います。

北海道大学大学院文学研究科教授 仲真紀子

■ 北大 司法面接研修

今年度も北海道大学構内にて、全国の児童相談所職員・警察官などを対象に、司法面接法の訓練を行う研修が、6 月・10 月・11 月の 3 回実施されました。

研修中に行われる模擬面接での被面接者役として、ここ数年は札幌市立琴似中央小学校のお子様にご協力いただいております。今年度は延べ 12 人の小学生に、研修者と 1 対 1 で面接を受けていただきました。

小学校から北海道大学までの移動中は楽しくお喋りし、大学到着後にゲームなどの活動をしてリラックスしていたお子様たちが、緊張の面持ちで面接にのぞまれ、しっかりと考えながら質問に答えているとのことでした。小学生相手の面接練習は、研修者にとっての大きな経験になっています。

面接終了・帰宅後にはアンケートを書いていただき、小学生の視点からの面接の印象を教えてくださいました。大人には思いもよらなかったような視点で感想が書いてあることあり、大変参考になりました。

平日の放課後の貴重な時間を使って面接にのぞんでくださった小学生の皆様、ご協力ありがとうございました。また、お子様を快く送り出してくださいました保護者の皆様にも心より感謝申し上げます。

(荒川順子)



お子さまには大型タクシーで来て頂いています。



1 対 1 の面接演習の様子です。



ご協力いただきました皆様、
本当にありがとうございました！



■ 「だいたい」と「正確」の質問に対する報告



昨年度に引き続き、「だいたい」でよいので教えて」と「できるだけ正確に教えて」の質問に対する、児童の報告を調査させていただきました。昨年度の調査では、1年生よりも4年生の方が、「だいたい」では「〇個くらい」といった粗い回答が、「正確」では「薄い黄色」といった詳細な回答が得られることがわかりました。今年度は、このような報告内容の調整が、こういった認知能力の発達に支えられているかを、1、4、6年生を対象に調査いたしました。具体的には、【1】言語能力（提示される言葉の意味を答える課題）、【2】認知を切り替える能力（次々と出

されるお題（動物、食べ物など）にあう言葉を報告する課題）、【3】記憶容量（提示される複数の単語を覚え、報告する課題）、【4】認知を抑制する能力（提示される文字の色を答える課題：「きいろ」を「あか」と答える）、そして【5】「だいたい」「正確」の教示の理解（提示された回答が「だいたい」「正確」の回答として正しいかを判断する課題）に焦点を当てております。現在、6年生の調査を継続中です。調査終了後、分析結果をご報告させていただきたいと思っております。ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。（佐々木 真吾）

コラム

こどもを犯罪から守るために家庭で出来ること ～ミュンヘンに学ぶ～

ミュンヘンの警察には、子どもの防犯予防担当の部署があります。ドイツ国内ではミュンヘンにしか設置されていないというこの特別な部署。その成果か、2002年をピークに年々ミュンヘン市の性犯罪被害児の数は減少しています。私はミュンヘン滞在中、この部署で20年間防犯を担当されてきた警察官、Ralph Kappelmeier氏による幼児・小学生の保護者向けの防犯セミナーを傍聴する機会がありました。ミュンヘンでの事例や教訓は日本でも十分に役立つ内容です。ここでその内容の一部を簡単にご紹介したいと思います。

犯罪者ってどんな人？

“子どもにいたずらするなんて相当変わった人では？”という先入観をもたれている方が多いかもしれません。しかし、実際に検挙された人を分析すると、7歳から70歳と年齢幅が広く、多くは既婚男性で、普通の職業に就いている親しみやすい人だといえます。そして、驚くことに、90%の加害者が、子どもの身の回りにいて、子どもが信用している人物だということです。お母さん方はよくお子さんに「知らないよその人には気をつけなさい」と言うかもしれませんが、よその人が犯人であることは少ないのです。とはいえ、身近な人たちに対して警戒するよう子どもに忠告するのは、あまりよいこととはいえません。子どもに不信感を植え付けてしまうかもしれないからです。では、どうしたらいいのでしょうか？

子どもの話に耳を傾けよう！

Kappelmeier氏は「いいことでも悪いことでも、その日起こったことを何でも子どもに話してもらおう、習慣づけて下さい」とアドバイスします。最

低でも一日に10分、子どもの世話以外に、子どもの話だけに耳を傾ける時間をとるとよいそうです。

「10分くらいいつも聞いているわ」というお母さん、忙しくてついつい子どもの話が耳を素通り...ということはありませんか？“大人に心配をかけたくないから何も話さない”というお子さんは少なくありません。大人たちは“いつでも話を聞くための時間を用意しているよ”と子どもたちに言い聞かせなければならぬのです。子どもの身近に潜む加害者は、その子がどういう性格なのかをよく見定めてから犯罪行為に踏み込む、といえます。何かあった時にすぐに大人に話すような子どもだ、ということがわかると、その子には手を出しづらくなります。逆に、普段からあまり大人に構ってもらえていない子は、ターゲットとなりやすくなります。“いつも話を聞いている”という保護者の行為は、性犯罪の予防に繋がるのです。

また、普段から子どもの話によく耳を傾けている親は、子どもの変化にも敏感に気づくでしょう。子どもの様子がおかしい時（悲しそうな顔、変な話をする、今まで喜んで行っていたところに「もう行きたくない」とか、「あの嫌いだ」と言う、など）、あるいは何か新しいことが起こった時、それを無視しないようにしましょう。そして、さらに子どもの話をよく聞いて、理由を調べてみましょう。ごく短い発話の中に、問題が隠れていることがあります。それは、性犯罪という事例には限りません。例えば、誰かになにかを取られたのかもしれないし、学校でいじめられているのかもしれない。そういったことも子どもにとっては大きな問題で、大人の助けを必要としているのですから。（田鍋 佳子）



2014年度 お子様 研究協力者 募集中

当プロジェクトでは、幼児から中学生まで、広くお子様の協力者を募っています。子どもの発達に関する心理学研究に興味関心のある方、あるいは協力者としてご登録いただける方は、どうぞ下記のホームページをご覧ください。

新学術領域研究・法と人間科学 「子どもへの司法面接：面接法の改善その評価」
〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学大学院 文学研究科内
電話/Fax: 011-706-2306 e-mail: child@let.hokudai.ac.jp
HP: <http://child.let.hokudai.ac.jp/>

